

何うも安うしをる、繁昌る筈ぢやなア分銅屋は、一兩一分、眞個ぢやぜ、而も夫れで十分食べた跡が此様なぢや『アツまた擴げ出した』サツ最う一遍包め『何遍包ませなさる、あんじよ懷中へ入れてお呉んなされ』懷中へ入れて玉子焼の汁が垂れたら困る、着物汚れるわい……ア、……心持ちが好い、コレ駕籠屋宜いことを聞いて遣るうか『何でやす』去年二月二十五日ぢや『へエ』讃岐屋と私しとなア二人連れで河内の道明寺へ詣つた其の途中の話ぢやアマア……『宜ろしい』今日中に片付きやせんて聞いて居ると、最う行かんかいな『マア宜しいと云ふやうな水臭いことを言はんと、私しの方から駕籠屋と言ふて、汝を乃公が呼びかけたのぢやない、乃公が機嫌能うに歩いて居るのに、モシ御機嫌の旦那とお前の方から呼んだぢやアないか』ソレ見い、理屈は先方にある『ナニ、然うやらうがな』『へエ』そやよつて聞かんかいな、振があるよつて前へ廻つて宜いか乃公は舞は下手やが、讃岐屋はちよつと舞ふなア、稽古を仕て居るさかいに舞はチヨイと舞ふのぢや、コラあんじよう見んかい『へエ見て居ります』ム、汝は宜い其方が俯向て居る『コレ左様なことを爲ないな』扇子をサツとな……蝶が茶種かイヤバツて奴ぢや扇子を拂ふ所が好きじや、蝶が茶種かヨウ……ナア駕籠屋、茶種は蝶の味知らず、茶種の味知らず、斯う唄ふのんかいな『知りまへん』何ぢや此様なことを言ふ……味知らず、アツ、チントンシヤン、ア——醉ふたく何だい笹棒奴、ヨウ……『モシ駕籠の中へ頭ア突込みなすつた』笹棒奴、呼んで來い誰れなと、何だい、何うなとせい、エヘツ……馬鹿ア……『オヤ

く、グウく軒を搔いて到頭寝て了うた、困るなア起せく『モシ旦那』ナナ何ぢや、何うするんぢや『イエ何うするも斯うするもござりません、駕籠の中へ頭ア突込んで寝て貰ふたら困ります、何うぞ彼方へ去てお呉れなはれ』去かいで、何時まで此様な處に居るものか、人がウツくと仕かけた所をヤツと突然に脊中を突きやがつて吃驚りしたわい……斯うつと、土産物は是で宜し、手拭は是れで宜し、何か其邊に忘れ物はないか知らん』在りまへん』然うか、また縁があつたら、あはうわい。さよなら』ほんまに馬鹿にしよる』そやよつて彼様な者に相手になるなと、最初に言ふて居るのに、向ふ先を見ずに馬鹿奴が……オヤツ南から來てまた南へ行よるぞ、オヤく、方角を取へて違るのぢやな醉てるさかい、酒癖が悪いのぢやなア、敵の孫末ぢやアなし、あんじように言ふて遣れエ』モシく南から來てまた南へ行つて居なさるがな、方角を取り違へて居なさるのやらう』ナニ南から來て南へ行けんかへ』大分に憎たらしい酒ぢやなア、大阪へ行くなら今方へ行かんと行かれやしまへん』誰れが大阪へ行く、乃公は堺の神明の町ぢや』夫れでは南から此様な處へ何しに來なはつたのぢや』『アノ、チヨツと酔醒しに其處まで』オヤく、鬨りに來やアがつたのぢや酷い目に遭うたな』コリヤく駕籠屋』へエ』アお駕籠が二挺だ』大きに有難うさまで』先なるはお嬢様、後なるは乳母様』へエ大きに有難うござります……オイ、駕籠が二挺やで、一挺は吉と留とに言うて遣れ、早う行け尻擲げて……エ、旦那、直ぐに調へますでございます』夫れから兩掛が一荷』有難うさまで、オーイ